

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 美しいホウセキを女性に贈る。
- 2 自分の将来をソウゾウする。
- 3 今日の成果をホウコクする。
- 4 話し合いでケツロンを出す。
- 5 自己紹介でトクギを披露する。
- 6 中世の貴族の生活について調べる。
- 7 誰が犯人なのか、見当がつかない。
- 8 丁寧な言葉づかいを心がける。
- 9 会議で、意見を否定される
- 10 どうしても納得できないことがある。

問二 次の文の「」にあてはまる人間の体の一部をあらわす漢字一字を、あとのア〜カから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 友人への誕生日プレゼントを奮発してしまい、予定の金額より「」が出てしまった。
- 2 文化祭の成功のために、クラスの仲間とすっかり「」を結んだ。
- 3 彼女は生徒会の会議で、いつも「」に衣着せぬ発言をする。
- 4 徒競走で一位になれず、がっかりと「」を落とす彼の姿が印象に残った。
- 5 まだまだ幼いと思っていた弟の急激な成長に、家族みんなで「」を丸くした。
- 6 あの人は、とても「」がきくという理由で、多くの人から信頼されている。

ア 肩    イ 足    ウ 歯    エ 顔    オ 目    カ 手

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一九六四年の夏、フランスのブルターニュで、恩師、パリ大学のボードワン先生に連れられ、海の底に棲むエポフィルスという昆虫を見に行ったときのことをよく覚えている。

潮が引くのを追いかけて、沖に二、三キロ歩いただろうか。満潮になれば二十メートルの深さに沈む岩場の割れ目に、エポフィルスはいた。

命がけで見に行った。時間をハカ<sup>①</sup>って、潮が満ちてきたら急いで戻<sup>もと</sup>った。

海が戻る水の流れは川のようなハヤ<sup>②</sup>さだった。そんな危険を冒<sup>おか</sup>すのは、ある意味ばからしいことかもしれない。だが、ものというのは大したことをやっていると実感した。

そういう虫がいて、人間が知らないうちに、ちゃんと動いている。海の底の有機物をエサにしている。そればかり食っているやつも、関係ないやつもいる。朝食うやつもいる。でも朝食うなら、その時間に潮が引かなければ人間には見ることができない。

そんなふうには、この海にはほかにも、ぼくらの想像もつかない変<sup>A</sup>ないきものがたくさんいるのだろう。そう思った。

また、ぼくは昔からガという虫が好きだ。 B、なぜ昼間飛ばないで夜飛ぶのだろうというところに興味がある。

昼間飛んだらいいじゃないか。暗いと敵がいなくて安全だというのが、夜に出てきてエサを探す敵もいる。暗ければ安全とは決していないだろう。

実際に、昼間飛ばガもいる。それは夜飛ぶガの苦勞はしていないはずだ。それでも夜飛ぶなら、昼間飛ばよりどこがいいのだろう、などと考えていると C なぜ夜飛ぶのか、わからなくなってくる。

それぞれに、それぞれの生き方があるのだ、といういいかげんな答えしか残らない。

それなりに苦勞しているんだ、としかいいようがない。

しかし、それなりに、どういう苦勞をしているのだろうということを、 D 考えてみるのがおもしろい。それは哲学的な思考実験に似ている。

エポフィルスにせよ、ガにせよ、苦勞するには苦勞するだけの原因があり、仕組みがある。それは何かということを探るのだ。

たとえば節足動物は、なぜ節足動物になってしまったか、ということから考える。祖先がそうだったから、彼らは体節を連ねる外骨格の動物になっていった。

すると体の構造上、頭の中を食道が通り抜けることになり、脳を発達させると食道にしわ寄せがいくようになった。ではどうしたらいいか。

樹液や体液、血液といった液状のエサを摂ることにした。それが、その形で何とか生き延びる方法だった。節足動物といういきものは、そういう苦勞をしている。

動物学では、現在の動物の形が必ずしも最善とは考えない。

そうならざるをえない原因があり、その形で何とか生きているのだと考える。

なぜそういう格好をして生きているのか、その結果、どういう生き方をしているのか。そういった根本の問題を追究するのが動物学という学問なのだと思う。

いろいろないきものを見ていくと、こんな生き方もできるんだなあ、そのためにはこういう仕組みがあつて、こういう苦勞があるのか、なるほど、それでやつと生きていられるのか、ということが、それぞれにわかる。

わかつてみると感激する。その形でしか生きていけない理由を、たくさん知れば知るほどカンシンする。

その感激は、原始的といわれるクラゲのような腔腸動物でも、高等といわれるほ乳類でもまったく同じだ。

このごろ、よく、生物多様性はなぜ大事なのかと聞かれる。ぼくは、簡単に説明するときはこんなふうにいる。

生態系の豊かさが失われると人間の食べものもなくなります。食べものも、もとは全部いきもので、人間がそれを一から作れるわけではないのですから、いろんなものがいなければいけないのです、と。

ただそれは少し説明を省略したい方で、ほんとうは、あらゆるいきものにはそれぞれに生きる理由があるからだと思っている。

(日高敏隆「世界をこんなふうに見てごらん」より)

問一 線①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄①～④にあてはまる言葉として適切なものを、あとのア～カからそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- ア ますます    イ たまたま    ウ そもそも    エ ひやひや    オ つくづく    カ いろいろ

問三 — 線A「変ないきもの」とは、どのような生き物をいうか。それを説明した次の文の空欄①（三字）と②（二字）にあてはまる言葉を答えなさい。

人間が「①」で行かなければ見られないような「②」な場所に棲む生き物。

問四 — 線B「そういう苦勞」とはどのような苦勞か、その説明として適切なものをあとのア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 生き延びるために脳を発達させたことで、液状のエサを摂ること。

イ 満潮になったら二十メートルの深さになるような岩場の割れ目に棲むこと。

ウ 節足動物の祖先がそうだったので、外骨格の動物になったこと。

エ 昼間飛ぶより、夜飛ぶ方が安全なので、夜に行動すること。

問五 — 線C「その感激」の指している内容として適切なものをあとのア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 他の人間が誰も見られないようないきものを、命がけて観察できたときの感激。

イ なぜかは夜に飛ぶのかという疑問に答えが出て、問題が解決したときの感激。

ウ いきものが生きるためにどのような仕組みがあり、苦勞があるかがわかったときの感激。

エ いきものの生き方について、根本の問題を追及し、研究できるようになったという感激。

問六 — 線D「簡単に説明するとき」とあるが、筆者の考えている本当の理由は何か。本文中から二十五字で抜き出しなさい。

問七 — 線E「生態系の豊かさ」と同じ意味の語を、本文中から五字で抜き出しなさい。

問八 筆者は、動物学のどういう点をおもしろいと感じているのか。次の言葉を使って説明しなさい。

・いきもの  
・格好  
・苦勞



次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

ぎーっ、とん。ぎーっ、とん。

あ のときも恐竜は鳴いていた。足を踏んでいた。

恐竜は水を飲み、土だけを食む。それ以外は、どんな植物も動物も食べない。だれもがそれを知っている。子どもたちも。

恐竜の背中に乗って遊びたがる子どもたちはたくさんいた。揺れ動く恐竜の背中<sup>①</sup>はかつこうの遊び場になるだろう。けれど、おとなたちは口を揃えて言う。

「近づいちゃいけないよ。おまえなんか、ひと飲みばい」

「 ( I ) 」

食べられることはないと知っていて、子どもは聞く。

「 ( II ) 」

「 ( III ) 」

「 ( IV ) 」

「 ( V ) 」

「そうや。やけん、近づいちゃいけないばい」

恐竜に近づけるのはおとなたちだけ。それも、主に女たちだ。女たちが恐竜の面倒を見る。女たちには恐竜の機嫌のよしあしがわかるから。

大きくなったら、ばあちゃんやかあさんのように、恐竜の世話ができるようになる。早く大きくなるといかん。小さかったわたしはそう思った。

「さよさんは若くして亡くなったんよ」と、ばあちゃんは言った。「喜久雄さんも長生きしんさらんかったねえ」とも言った。「気の毒やね。いまなら治るものの、昔は治らんかったことがようけあつたきねえ」

写真を見るかぎり、わたしには、さよさんはおばあさんに見えなし、喜久雄さんはおじいさんに見えた。

死んでしまうと、みんなおじいさんとおばあさんになってしまうのだ。そう思ったら、なんだか恐ろしくなつて、わたしは泣き出してしまった。

「由香、どげんしたと？」

と、ばあちゃんが聞く。

「あんなあ、あんなあ」

考えていることを言葉にしようとするのに、それがうまくできなくて、またわたしは泣く。

「泣くことはないだよ。なんも怖いことはなかと。ご先祖さまは、由香を守ってくんしゃるき」

「うん」

「さ、ちよこつとお昼寝しようかねえ。いい子はお昼寝ばせんと」

「うん」

夏の昼下がりに。仏間はひんやりと涼しく、お線香の匂いがしみついてた。その部屋に、（Ⅴ）が入り込んでくる。短い命を惜しむようにじれて鳴く蝉の声と終わることのない命を刻む恐竜のゆるやかで長い声。

部屋の隅に重ねられている夏座布団には、かさかさとした手触りの真新しい麻のカバーがかけられている。ばあちゃんはそれを二枚ずつ取って畳の上に並べて敷き、お昼寝用に即席の寝床を作る。

「さ、由香も横になりよ」

手本を見せるように、ばあちゃんが横になる。

わたしが寝転ぶと、ばあちゃんは、わたしとじぶんのおなかの上にタオルケットをかけてくれた。

「ばあちゃん」

「なんね？」

「恐竜が鳴いとう」

「恐竜？」

「ほら、ぎーっ、とん、ぎーっ、とん、て」

「ああ、白のことかね？由香にはあれが恐竜の鳴き声に聞こえんと？」

「うん。ばあちゃんには聞こえんと？」

「そうやねえ。恐竜ち、思ったことはなかったばい」

「じゃあ、ばあちゃんにはなんに聞こえるの？」

「そうやねえ」

ばあちゃんはまたそう言うだまと黙った。

「そうやねえ」

同じ言葉をばあちゃんは繰り返す。なにに聞こえるのか考えているのだ。でも、答えるより早く、かすかでやすらかな寝息が聞こえだし、わたしは、ばあちゃんが、答えより、わたしより、先に眠ねむってしまったことに気づく。

「ばあちゃん」

<sup>D</sup> 小さく呼んでも返事はない。

ばあちゃんの寝息がいちばん近い物音になり、蟬と恐竜の鳴き声は静けさを際立たせ、わたしは退屈たいくつで、昼の時間がひゆるひゆるとのびていくように感じた。

それでもいつのまにかわたしも眠ってしまった。

目が覚めると、隣にばあちゃんはいなくて、座布団だけがそのままになっている。その上にたたまれたタオルケットが置いてある。

(石井睦美『皿と紙ひこうき』より)

問一(1) —— 線部①②③の本文中における意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで答えなさい。

- |           |                               |                               |                                  |                                |
|-----------|-------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|
| ① 「かっこうの」 | ア 豪華 <small>ごうか</small> な     | イ ちようど良い                      | ウ 適さない                           | エ 危険な                          |
| ② 「口を揃えて」 | ア 異口同音 <small>いこうどうおん</small> | イ 言文一致 <small>げんぶんいっち</small> | ウ 鶏口牛後 <small>けいこうぎうご</small>    | エ 大同小異 <small>だいどうしょうい</small> |
| ③ 「際立たせて」 | ア 気付かなくさせて                    | イ はつきりとさせて                    | ウ 魅力的 <small>みりよくてき</small> にさせて | エ 弱らせて                         |

(2) —— 線部①②③は擬音語と擬態語のどちらであるか、それぞれ記号で答えなさい。

ア 擬音語

イ 擬態語

問二(1) 空欄「くく」に入るものとして最も適切なものをあとのア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひと飲み？ひと飲みって、なんね？子どもば、食べるど？

イ けがば、するど？

ウ 死んでしまうど？

エ けがじゃすまん

オ 食べんけど、臼うすは重か。つぶされたらおおごとばい

(2) 空欄「く」に入るものと同じ語句が、空欄「く」より後の本文中にある。八字で抜き出して答えなさい。

問三 — 線A「恐竜は鳴いていた」とあるが、実際には何の音が聞こえていたのか。あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恐竜が足を踏みつける音

イ 蟬が鳴いている声

ウ 土をつく臼の音

エ すべり台のきしむ音

問四 — 線B「小さかったわたしはそう思った」とあるが、どう思ったのか。あとのア～エから一つ選んで答えなさい。

ア 恐竜には絶対に近づいてはいけないと思った。

イ 恐竜の機嫌をそこねないようにしないとと思った。

ウ おとなの女たちの手伝いができるようになりたいと思った。

エ 早く大きくなって恐竜をこわがらなくなりたいと思った。

問五 — 線C「泣くことはないよ」とあるが、由香が泣いた理由を二つ、文中の言葉を用いてそれぞれ四十字以内で答えなさい。

問六 — 線D「小さく呼んで」とあるが、その時の由香の心情として最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 恐竜に気付かれるかもしれないことへの恐怖。

イ おばあちゃんが答えてくれないことへの不満。

ウ おばあちゃんが寝てしまったことへの気づかい。

エ おばあちゃんが私より先に寝てしまったことへの失望。